

加齢黄斑変性 第2版

吉村長久 編

待望の『加齢黄斑変性』の第2版が出版されました。

加齢黄斑変性という疾患は「狭義加齢黄斑変性」と「広義加齢黄斑変性」という用語がある一方で、ポリープ状脈絡膜血管症（PCV）の病気の本態は新生血管か、異常血管かといった議論があり、ある意味体系立てて理解しにくいという問題がありました。そんな中『加齢黄斑変性』初版では、PCVに多くのページが割かれ、通読しても面白く、一部を読んでいくだけでも加齢黄斑変性の理解が深まりました。

しかしその後、新生血管の研究が進み、抗 VEGF 抗体治療も新しい局面を迎え、pachychoroid などの概念が出てきて、加齢黄斑変性の概念も変わりつつあります。また初版では時代的背景もあり使用された OCT 画像が time-domain のものも多く、解像度の点で粗い画像が多かったという問題がありました。

第2版では画像が圧倒的にきれいになっており、さらに加齢黄斑変性の概念図が大きく変わっています。分担執筆が多い昨今にあり、編集の吉村長久先生の考えで貫かれた一貫性のある内容で、通読しても面白く、一部を読んでいっても理解が深まるという点はそのままですが、第2版というよりも別の本かと思えるほど内容が一新しており、継ぎはぎ感がありません。初版では、PCVは新生血管か血管異常かという議論があったという歴史的な背景があり、PCVに多くのページが割かれており、読み物としても興味の尽きない内容で、第2版が出版されたことの、最も惜しむべき点は初版が手に入らなくなったことかもしれません。

ん。

第2版の特徴を列挙しますと、今後欧米ほどでないが日本でも多くなることが予想される萎縮型加齢黄斑変性に多くの記載が割かれていること、症例検討が豊富に用意されていること、これまでに行われてきた抗 VEGF 治療の大規模臨床試験に多くの記載があり、よく理解できることが挙げられます。しかし何と言っても最大の特徴は、ややもすればわかりにくい加齢黄斑変性の概念が容易に理解できることです。診察検査の項では、眼科医の基本姿勢と眼底疾患全般の診察の仕方がしっかりと書かれている点は変わりなく、日頃の忙しい診療に流されがちな自分自身を反省させられるとともに、若い眼科医にも通読して基本として身につけてもらいたい部分です。

本書は、混乱した、理解しにくい加齢黄斑変性の分類の歴史、概念が、吉村先生の頭脳というフィルターを通して整理されて頭に入ってくるという点が特筆すべきところです。「序」にもありますように OCT angiography についてはまだ使用が始まったばかりであり本書では扱いがありませんが、本書を読めば、吉村先生の編集による OCT angiography についての本も早く読みたいと切望する気になるはずです。

長崎大学院教授・眼科・視覚科学
北岡 隆

A4 頁 352 2016 年 3 月
定価：本体 18,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02448-8] 医学書院刊